

## すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 岩田温子 訳

### 第5回 意気盛んな中期の作品

高鳳蓮さんの中期の作品は90年代中頃から後期のものを指します。

この時期、高家では子供たちが成人し、老人たちは亡くなり、経済的には以前よりだいぶ良くなって来ました。物事をじっくりと考え、剪纸の仕事に専念する時間のゆとりが大幅に増えてきました。彼女の剪纸の構想は幅広くなり、表現されている内容はいっそう明確になりました。

高鳳蓮さんの剪纸作品は各種の展覧会に出展され賞賛を浴びることがたえませんでした。テレビ局や新聞などのメディアは民間芸術の根源を探ろうと、レンズや視線を高鳳蓮さんの上にも集めるようになり、その名声は陝北の大地の上にゆっくりと昇っていったのです。

当時、民間芸術の故郷NO.1として認定されていた安塞県ではそれらの名手である老人たちが相次いでこの世を去り、次世代の一部の人たちは進取の精神が無く模倣にこだわり、民間芸術の市場は玉石混淆の複製品が溢れました。作品はよく売れ、そのおかげで沢山の作家たちが貧困から抜け出て豊かになりましたが、民間芸術本来の味わいや形はすっかり失われてしまいました。このため民間芸術研究者たちの安塞県に対する興味が失われて行ったまさにその時、延川にいる高鳳蓮さんが新たな目標と定められました。

高鳳蓮さんの剪纸作品の最大の特徴は、図柄の殆どの動物、人物の形が現実の形から抜け出て、“大まかな形は似ている”のですが、しかしよく見れば全てが異なるものの組み合わせで成り立っていることです。

また高鳳蓮さんの作品の目の表現は、目は丸い点で目玉を、目の周りは魚の形で、眉毛は鋸の歯のようにするというような従来のような決まったやり方ではなく、二本の弧線や花に似た模様を取って代わられたことが判ります。高鳳蓮さんは「人のまつげはきらきらとしていてまるで花の蕾のようだ。目を花の形にするとまるで絵のように綺麗になる」といいます。ですから高鳳蓮さんの剪纸の中では男性の目は牡丹の花の模様で、女性は蓮の花の模様で剪られていることが多く見られます。牡丹は富貴の代表であり、蓮花は純潔をあらわしています。

彼女は龍王の剪纸のなかでその二つの目を二匹の小さな龍で表現しました。両腕、両足、両耳さえも龍の装飾をほどこしました。龍王本体も含めて合せて9匹もの龍になります。9という数字は民間では天の定めとされ



龍王 90年代後期

ており、何事も不可能なものは無いという龍王の神霊の象徴になります。人々は龍王を祭り、龍王に従うことで初めて風も雨も順調になり、五穀豊穡が約束され、国と民は安泰になり、家族は安楽に日々を送ることができました。こんな風に90年代中頃の高鳳蓮さんの剪纸はいっそう個性的になり更に成熟してゆきました。

主要な作品は遙か大昔の神話や民間伝説から身辺諸事に至るまでますます幅広く題材にしています。例えば<蛇が雀を飲む>、<龍王>、<二十四孝>、<二人の老人>、<黄河を渡る>など、いずれも彼女が伝え聞いたことや自身で経験したことなどを表現し、その作品には更に大胆さ、奔放さ、人情味が加わりました。さらに、研究者のヒントの下に自然界や神からの啓示の象徴として「卍」の符号を装飾に使うようになりました。

創作意欲が元気いっぱい溢れた高鳳蓮さんの作品に風格が加わり、制作に当たっては子供たちの協力もあって大きな作品が剪られるようになり、作品数も増え、中国伝統の剪纸の分野ではだんだんに全国にまで名を馳せた地位を築くようになったのです。この十年来殆ど全国剪纸大展の全ての最高賞を独占しました。

例えば：

- 1989年 第一回延安地区テレビ剪紙コンテスト一等。
- 1995年 北京第4回世界婦女大会期間中、中央美術院陳列館にて展覽。このときの多数の剪紙と布堆画(アップリケ)は館に収蔵された。
- 1996年 多数の布堆画が中国美術館に収蔵。
- 2000年 北京中国美術館で開催された“中国剪紙世紀回顧展”で特等賞。作品は中国美術館に収蔵。
- 2001年 山東省威海で開催された“中国民俗風情剪紙芸術展”で金賞。
- 2002年 北京革命博物館開催の“華夏風韻剪紙芸術展”で金賞。

数年来、多くのメディアが彼女を特集した報道をおこないました。現在は、中央テレビ局の番組“夕陽紅”のタイトルの場面で毎日高鳳蓮さんが紙を剪るカットがあらわれます。彼女は手の中の剪紙を持ち上げ、テレビを見ている観衆に対して美しく、にっこりと笑いかけます、中国の数億の働く女性の代表の姿です。彼女の名声は高まり、それと同時に作品の値段も急激に高騰しました。

高鳳蓮さんがこのように民間芸術の最高峰の地位に達することが出来たのには、現在中国民間芸術研究の分野での古参の研究者・靳之林先生の、一方ならぬ力添えがあったことも否定できません。これまで彼女が作品を送った各回の展覧会で、先生は多数の意見を押しやり最高賞の冠を高鳳蓮さんの頭の上に載せました。先生は剪紙芸術に深くのめりこむこと40数年、延安地区に13年も住んだ経歴もあり、陝北の風俗、風土をこよなく愛し、理解しています。

先生は、文字を全く知らない陝北の老婆の潜在意識の中に太古からの息遣いが細々ながら伝わってきていることに感動し、高鳳蓮さんが作品を通して天や地や太古からの便りの代弁者であると高く評価しています。そして、

どんな名誉や名声が高鳳蓮さんの上にあろうとも、彼の黄土の僻地で、夫と共に、家族を守り、痩せた土地を耕し、家畜の世話をし、厳しい家計の遣り繰りをしながらしっかり暮らしてゆく姿にこそ、彼女の芸術の源があると述べています。



人々 90年代後期

